

ウラギンシジミはその名前のとおり、羽の裏面全体が白銀色の鱗粉で覆われていて、相当離れたところで飛んでいても、白銀がきらきらと光って見えるのでウラギンシジミだと判別できます。まさにそのような遠く離れた場所に飛ぶウラギンシジミを認めたのが、通勤途上の朝、JR明石駅のプラットフォーム。ここで事件が起きました。特別快速電車が入ってくるまでやや時間があり、私は遠くの木々の梢を楽しげに舞うウラギンシジミに「こちらへ飛んで来てよ」と心でつぶやきながら目を離さずに眺めていたのですが、なんと、ウラギンシジミはとつぜんこちらに向って飛んできたではありませんか。そしてまさに私のまん前までやってきて「ちゃんと来てあげたよ」といわんばかりにレールの上にとまって♂であることを示す赤い翅表をしっかりと見せてくれたから、またどこかへと飛び去ってゆきました。あとで地図を確認したら150mほど離れたところからの飛来です。このときばかりは自分にチョウをおびきよせる超能力があるのではないかとさえ思いました。それからまた時を経たある朝、やはり電車を待つ私の目の前にアサギマダラがふわりとやってきて「お勤めご苦労さん」といわんばかりのあいさつ飛翔を展開してくれ、やはり私はチョウに好かれているのだ、とひとり悦にいったものです。

ところが、私よりもさらに上手の超能力をもっていると思われるのが、私も参加している加古川の里山・ギフチョウ・ネットの代表：竹内隆さんで、世界で初めて野外の自然のなかでギフチョウが蛹から生まれる瞬間をみごとにビデオ記録されました。しかも二度までも。チョウ観察会などで同行した場合でも、まちがいなく2、3種、私が出会えなかったチョウのきれいな写真撮影に成功してしまうし、ウラギンシジミについても、早春の雑木林でギフチョウの羽化はまだかと探索していた際、足元の落ち葉のすきまに横倒しの格好で越冬していたウラギンシジミを見つけたのも竹内さんで、完全に脱帽です。

昨年から意識的に身近なチョウの標本も作製しようと努めているのですが、ウラギンシジミの標本はまだ古い記録のものしかありません。幼虫が好んでフジの花を食べるので、近隣にも普通に発生しており、松波町でも何度か目にはしています。シジミチョウの中では図抜けて体が大きく、強い飛翔能力があります。♂で翅表の赤い部分が♀では銀白色となるので雌雄の判別は容易です。和歌山産の♀にみられるように秋には羽の先が



Sep.17,1967 京都市音羽谷
ウラギンシジミ♂



Oct.31,1998 和歌山田辺市天神崎
ウラギンシジミ♀



Sep. 15, 2000 相生市
ウラギンシジミ♂

より尖った秋型となり、そのまま成虫で越冬します。観察例の多くは樹木の雨露がしのげるような位置の葉っぱ裏に静止したままで冬を越しているようですが、落葉の間で冬越しをした竹内さんの発見はかなり珍しい例かもしれません。裏面が銀白色であることを示す写真も示しておきますが、これはアサギマダラとの出会いを求めて相生の三濃山へ行ったとき、なぜか止めておいた車に執着してくれたウラギンシジミで、車体鏡に映った自分の姿にうっとりしているのかもしれないね。



May 30, 2015